

## 0. はじめに

私は宇都宮の中心部に生まれ育ち、そして今も生活をしている者です。最近とみに元気を失っていく街を見るにつけ、「街の元気がなくなるということは、お店がなくなるとか、住んでいる人が減っていくだけでなく、街の歴史や文化も消えていくこと。空襲で焼け野原になった街を一から作り直していった歴史を思うと、何か自分でもできることがあるのではないか」との思いを強くし、2年ほど前からまちづくりについて少しずつ勉強をしてきました。

この小論は「5時まで県職員・5時からまちづくりリスト」の私が思い描く、「宇都宮の中心市街地を元気にする方法」です。

## 1. これからの中心市街地の役割

高度経済成長期、宇都宮の「顔」として栄えた中心市街地も、大型店の倒産、撤退、空き店舗の増加により、空洞化が進んでいます。その原因は車での来店の不便さや、駐車場の確保の困難さが挙げられ、大型店は郊外の幹線道路沿いへの出店が相次いでいます。

しかしながら、住民すべてが車を運転して郊外の店舗へ買い物に行けるわけではありません。特に中高年齢層は、もともと運転しない、あるいは加齢により運転をやめた、など運転できない人が多い世代だと思います。

非運転者にとって主要な移動手段は公共交通機関です。現在、中心市街地にはほとんどのバス路線が乗り入れ、さらにJR宇都宮駅から一定区間は100円の特別料金が設定され、100円の循環バスの運行や70歳以上のバスカードの割引制度も導入されています。

また、高齢者という介護問題などがクローズアップされますが、元気で買い物を楽しみたい、おいしいものを食べたいと望んでいる人も大勢いると思います。

これらのことから、公共交通機関の発達した中心市街地は、今後、中高年齢層を対象にしたまちづくりを行うことで、新たなにぎわいを生み出すことができると考えられます。

## 2. 中心市街地活性化策

### ①「配達システム」の導入

公共交通機関を利用すること、自家用車を使用しないことから生じるデメリットは何でしょうか。その一つに、購買品の持ち帰りの不便さが挙げられると思います。食料品や日用雑貨を徒歩やバスで持ち帰るのは重労働です。雨の日や風の日もあります。重たさゆえに買いたいものも買わずに帰ることもあります。

その不便さを解消する手段が「配達システム」です。既に大型店の中には有料の配達サービスを実施しているところもありますが、このサービスを周辺の商店街にも広げることを提案します。それにより、配達経費の縮減、商店街の売上増強とイメージアップ、買い物客の利便性の向上などの効果が期待できます。

空き店舗などを配達物の集積所とし、各店舗における配達物の有無や配達先の情報にITを活用し、効率的なシステムを確立します。

## ②「エコカー」の導入

配達システムにはエコカーを導入し、エコカーの燃料には家庭から出る廃食油を回収・再生し、利用します。

廃食油の回収は専用容器を用い、商店街等に直接持ち込んでもらうほか、配達の合間に取りにいくなど、協力者の利便性に配慮しながら、効率的で安全な方法を考えます。

リサイクル協力者には容器の大きさに応じ、地域通貨を発行します。地域通貨により住民のリサイクルへの意欲が高まるものと思われます。地域通貨を使って得られるサービスには多様なものが考えられますが、商店街での割引や上述の配達サービスの無料化を含めれば、商店街の活性化にもつながります。

## ③ 飲食店との連携

廃食油の回収には、中心部の飲食店にも協力を呼びかけます。廃食油だけではなく、生ゴミのリサイクル化により堆肥を生成、それを使って地元農業者に有機栽培の農作物を生産してもらい、飲食店の食材とすれば、「地産地消」も実現できます。新鮮で安心な食材を用いたおいしい料理の提供は、健康に関心の高い中高年齢層へのアピール度も高く、飲食店のセールスポイントの一つになると思われます。

## ④ おもてなしの心を加えて

「リサイクルシステム」を取り入れながら、中高年齢層を惹きつけるしくみを考えてきましたが、「おもてなし日本一」を目指す宇都宮の中心市街地として、もうひと味つけ加えたいと思います。

その道具が「まちの駅」です。「まちの駅」とはNPO地域交流センターによって発案されたもので、「トイレ等の休憩機能」・「まちに関する情報の発信機能」・「もてなす人・もてなしを受ける人同士の交流機能」・「まちの駅間の連携機能」の四つの機能を持つ施設です。

このために新たな施設を造る必要はなく、商店など既存の建物に最低限次の四つの要素がそろえば、だれでも、いつでも始めることができます。その要素とは、(A)まちの駅であることを示す看板、(B)トイレ・休憩スペース、(C)商店街マップやパンフレットなどのまちの情報、(D)来た人を笑顔でもてなし、まちのことを説明する案内人（商店の場合は店員が兼ねてもよい）です。

そこに行けば、トイレが使える、一休みできる、様々な情報が一度に手に入る、話し相手になってくれる人がいる「まちの駅」は中高年齢層にとって強い味方だと思います。

また、既存の店舗等に上記(A)～(D)の要素をそろえて「まちの駅」にするほか、トイレメーカーの最新製品を試用できるようにした「トイレの駅」、持ち込みOKの日本茶カフェやコミュニティ・レストランを設けた「ちょっと一息つける駅」、廃食油の預かり業務を行う「リサイクルの駅」、公園の一角をまちの人に無料で貸し出し、好きな草花を栽培してもらう「ガーデニングの駅」など、特定の機能を特化させた「まちの駅」を設置することにより、新たな街の顔にすることも可能です。

さらに、「まちの駅」は訪れた人が便益を受けるためだけのものではありません。他県で行われた社会実験によれば、普通の商店が「まちの駅」になり、「まちの案内人」になった店員が

人からまちのことを尋ねられたりしているうちに、これまで自店の売り上げのことしか考えなかった商店の人たちが、まちのことを勉強するようになり、やがてまちの活性化のためのイベントを自主的に行うようになったという、商店側の意識変革の兆しも認められています。加えて、まちの駅に集まる一般市民がそこでの交流のなかで、まちづくりのアイデアを生み出し、実行に移すという可能性も期待されます。

来る人に安心・便利を提供し、迎える側とのふれあいから街に新たな活気をもたらす「まちの駅」を、まず一つから作ってみてはどうでしょうか。

#### ⑤ 各活性化策の連携

上記①～④の各活性化策は、別図のように相互に機能的に連携しあうことによって、さまざまな人のさまざまなまちへの想いを有機的に結び合うこととなります。もちろん、このためには、これら各活性化策を総合的にコーディネートする組織が重要です。

### 3. おわりにかえて

今回提案したしくみは、いずれも全国レベルでは先行事例のある、決して斬新とは言えない、ささやかなソフト事業です。しかしながら、建物を造る、道路を整備するといったハード事業だけでなく、まちに住む人・働く人・遊びに来る人というまちの担い手が気軽に参加でき、自分たちもまちづくりの主役であることを実感できるようしくみもまた、まちづくりには欠かせないものではないでしょうか。

そして、参加することで生まれる人と人とのつながりは、まちを変えていく、まちを元気にする原動力になるものと思います。

# 合言葉はリサイクル

